1953 戦後の近代化の見直しと文化復興の気運が高まる中、南安曇教育会「碌山研究委員会」が発足。東京国立博物館、東京藝術大学など、中央と地方が一体となり研究・顕彰・作品保存が行われる。

1957 （財）碌山美術館設立委員会（委員長・平林盛人（もりと）発起人198人、委員295人）が設立。基金募集・建設に入った。

1958 県内小・中学生の5円・10円の寄付をはじめ、守衛を敬慕する全国29万9、113人の寄付と奉仕で碌山美術館が穂高中学校隣地に誕生。

1961 皇太子ご夫妻（現天皇・皇后両陛下）のご来館。熱心に鑑賞される。のち、多くの宮さま方もご来館される。

1964 NHK日曜美術第1回対談「私と碌山 荻原守衛」ゲスト臼井吉見が出演。同氏は翌年から大河小説「安曇野」第1部を刊行し、多くのメディアで美術館や安曇野紹介が増大していった。

1967 碌山の絶作「女」が国の重要文化財に指定。500余人の労力奉仕で付属館（グーズベリーハウス）建設。

1968 「北條虎吉像」が国の重要文化財指定。付属館に続き、労力奉仕で古枕木を利用した収蔵庫「美術の倉」を建設。

1982 収蔵作品の増加に対応し新館（第1展示棟）を開館。この年から館報を刊行。県内小中高大各校、全国の関係機関などに配布。

1996 展示環境に配慮した第2展示棟（企画展示室）を建設・翌年開館。

1997 建設省開省50周年を記念した日本公共建築100選に選出。100選中、最小の建築物。

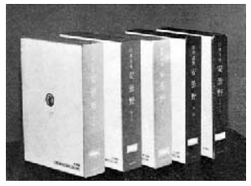
2003 （財）碌山美術館が県内の実績顕著な個人・団体に贈られる信毎賞を受賞。

2007 市の公園「碌山公園」が完成。碌山美術館は公園の指定管理者になる。

2008 4月22日の碌山忌を期して、碌山美術館誕生50周年。多機能施設の「杜江館」が開館予定。年間を通じて、さまざまな記念企画が予定されている。

建設中の美術館本館

皇太子ご夫妻（現天皇・皇后両陛下）と平林盛人初代館長


「安曇野」（臼井吉見著）

重要文化財「北條虎吉像」

桜と美術館本館

碌山公園内研成ホール

胎動

美術館建設の気運は、まず、南安曇教育会（現・安曇野市教育会）から発した。

碌山の遺作は、明治43年の没後、新宿中村屋の離れの建物の2階で、そして大正5年には、郷里の穂高・矢原に別棟で、いずれも「碌山館」という名で守り続けられてきた。

昭和12年（1937年）、南安曇教育会会長・小松進は、「作品を恒久的に保存するためには、耐震、耐火の『美術館』を設置しなければ」と荻原家と再三交渉を重ねた。生家の「碌山館」はかわらぶきの木造平屋。地震、火災による破損の恐れがあり、石こう像はすでに老化していた。

しかし、わずか30歳で逝った弟の生命を、その作品の中に感じていた碌山の兄・十重十（とえじゅう）は、「あくまでも身近に置いて見守りたい」という願いを持っていた。美術館設立は思いとどまらざるを得なかった。その後、昭和25年にも美術館の建設が企画されたが、やはり実現にはいたらなかった。

昭和28年（1953年）、南安曇教育会は、梓川中学校長・横沢正彦を委員長とする「碌山研究委員会」を発足。全会員は、毎月15円を出し合い、東京藝術大学助教授・笹村草家人（そうかじん）の指導のもと、深夜まで、また休日返上で碌山生家に寄り、資料の研究や書物の刊行などを精力的な活動をした。そして、次第に荻原家との信頼関係が築かれていった。

その研究ととき同じくして、国は、碌山の3作品をブロンズ化し国有化することを決めた。

南安曇教育会と地元・穂高町では、このことを記念し、穂高公民館で「荻原碌山作品展」を開催。東京藝術大学教授・石井鶴三（つるぞう）、笹村草家人の講演では聴衆者は当時としては異例の1、500人を超えた。郷土においても気運が高まっていった。

昭和の大合併

この時期、南安曇、東筑の町村は、「昭和の大合併」の渦中にあった。

昭和29年（1954年）、碌山の生家がある穂高町は近隣3カ村と合併し、新・穂高町が誕生。初代町長には、これまでも碌山顕彰に深くかかわってきた平林盛人（もりと）が選任された。各方面で幅広い交友があり、大局的な視点を政治信条としていた平林は、碌山の遺作が郷土にとっても永代的な価値を持つことを確信していた。

当時、地方の財政の状況は、学校建設や消防など、地方に委ねられる事業が増大したことから、大変厳しい状況だった。この時期、長野県、穂高町においても地方財政再建特別法が適用されており、自らの判断で使える補助金は限られていた。

美術館建設に必要な資金は、800万円余り。当時の状況では、考えられないほどの額であった。

尖塔の不死鳥

生家の碌山館